

第4部

活動・経験まとめ

科学探査学会 (SSE); グローバル展開の拡大

Paul E. Cizdziel, *Ph.D.* ポール チーズジェル, 博士

Society for Scientific Exploration Japan 支部長 (東京, 日本)

要旨: 米国に本部がある **Society for Scientific Exploration (SSE) 科学探査学会** は、科学の伝統的な境界を越え、主流な科学によって無視されたり、研究が十分になされていない現象の研究を取り上げている専門学会であり、多分野の科学者と学者から構成されている。1982年に設立され、現在、会員数は、専門家のみならず学生会員と無料アカウント会員を含めて増やし、1,000人を超えるまで成長した。**Journal of Scientific Exploration (JSE)** は、SSEの四半期ごとに出版される査読付き学会誌である。JSEは、事実に対して既存の分野から科学的に間違った説明をされている問題、既存の科学の枠で規定できない新規な現象、そして分野間のつながりに関する哲学的な問題まで、広範囲に興味深いトピックの独創的な研究結果を掲載している。現在、同誌の120以上の特集号がオンラインで無料で読める(オープンアクセス)。

SSEは、**ISLIS**が創立から科学への取り組みを始めて25年を迎えることを祝賀する。我々はまた、**ISLIS**が **Human Potential Science** (人間の潜在能力についての科学) に焦点を当てていることは、SSEで行われている研究の流れと非常に一致していると認識している。最近の2つの例としては、Dean Radin (**ISLIS** 学会誌編集委員でもある)によるオンライン Psi Experiment を記した JSE Winter 2019 の論文、Russel Targ による Stanford での Remote Viewing Operations などがあり、両著者とも超能力研究のオピニオンリーダーとして注目されている。さらに、SSEの現会長ウィリアム・ベングストンは、社会科学から分子生物学までを包含する幅広い視点から、超能力治療現象を科学的に研究する分野を長年に渡ってリードしている。

アメリカの SSE には3つのローカル支部があり、現在は日本にも支部が設立されている。私自身が2019年に設立した SSE-Japan は、アジアにおける SSE に対する認知、協力、支援をさらに拡大するために設立された。昨年、SSE-Japan では関心の高まっている問題に関しローカルイベント(東京)を10回開催した。さらに我米日の有力な学術機関との間で、遺伝子移植乳がん細胞の成長に及ぼすエネルギー治療活動の治療効果を探るための研究プロジェクトを立ち上げた。

SSE-Japan の支部を通して、私は日本の一般の方々をもっと巻き込み、教育し、SSEと同様のビジョンを支持する他の専門調査グループ(**ISLIS** など)の間の橋渡しをしたいと考えている。太平洋地域全体で人間の潜在的な科学についてのアイデアを融合し、進歩させるためのコミュニケーションと協力は、科学的な結びつきを強化し、世界社会に利益をもたらすことができると考えている。

キーワード: SSE, SSE-Japan

The Society for Scientific Exploration (SSE); An Expanding Global Reach I

Paul E. Cizdziel, Ph.D.

Society for Scientific Exploration Japan Chapter (Tokyo, Japan)

Abstract: The SSE organization is a multidisciplinary professional organization of scientists and scholars committed to studying phenomenon that cross traditional boundaries of science and are ignored or studied inadequately by mainstream science. Established in 1982 the membership has grown to over 1,000 professional members with many more student members and free accounts. The Journal of Scientific Exploration (JSE) is the quarterly, peer-reviewed journal of the SSE. The JSE has published original research on topics of interest that cover a wide spectrum, ranging from apparent anomalies in well-established disciplines to rogue phenomena, as well as philosophical issues about the connections among disciplines. More than 120 issues of the journal are now free online (open access).

The SSE organization congratulates **ISLIS** on its 25th Anniversary of service to science. The strong focus of **ISLIS** on **Human Potential Science** is aligned nicely with much of the research performed within the SSE scientific community. Examples include two research articles published in the Winter 2019 JSE issue describing *On-line Psi Experiments* by Dean Radin, and *Remote Viewing Operations at Stanford* by Russel Targ; both authors being respected thought-leaders in psychic research. Furthermore, the current president of the SSE organization (William Bengston) is a long-time leading researcher in the scientific study of psychic-healing phenomena from the viewpoint of social science down to molecular biology.

There are three local chapters of the SSE in America, and now a local chapter in Japan. Founded by myself in 2019, the SSE-Japan organization was created to further expand awareness, cooperation and support for the SSE in Asia. In the last year, the SSE-Japan held ten local (Tokyo) events with growing interest. Furthermore, we are in the process of establishing a research project with a leading Japan academic institution to explore the therapeutic effect of digital recordings of energy healing activity on the growth of engrafted breast cancer tumor cells in mice.

Through the SSE-Japan local chapter, it is my intention to involve and educate more of the general public in Japan and build bridges between the SSE and other professional research groups (such as **ISLIS**) that espouse similar visions. Communication and cooperation to blend and advance *Human Potential Science* ideas across the Pacific can strengthen scientific ties and benefit the global community.

Keywords: SSE, SSE-Japan

国際生命情報科学会(ISLIS)との出会い(氣の散歩道)

北川 壽昭

H・K朝日研究所 所長, NPO 法人 氣功文化センター 常務理事
国際生命情報科学会(ISLIS) 評議員, 国際総合研究機構(IRI) 監事
元 日本電気(株) エグゼクティブ エキスパート

要約 : 私は日本電気(株)に勤務し,当社の関本忠弘会長が **ISLIS**の特別顧問となり,そのご縁で私も会員となりました.超常現象には興味があり特に氣に関係のありそうなものには特に深い関心があります.EGELY WHEEL,O-リングテストと出会い氣の存在を強く感じ,退職後 H・K朝日研究所を設立して氣の調査を行いました,再現性がなく自分で氣を実感すべく氣功を習得中です.氣は生命の源で人類最大の未解決課題と考えています.この解明に **ISLIS**の活躍が貢献されることを切に願っています。

キーワード : 氣,EGELY WHEEL,O-リングテスト,健身氣功,国際健康健美長寿論壇

私は 37 年間 日本電気(NEC)でサラリーマン生活を送り,皆様のように立派な研究成果を発表するものではありません.ただ不思議な現象,特に“氣”に関連すると思われる現象には非常に興味があり,**ISLIS** と会社のご縁で出会い,いろいろな先生方から学ばせて頂いた事,退職後の第2の人生として“氣”の調査や氣功に関わった事,などについて述べさせていただきます。

1964(昭和 39)年 日本電気に入社し,コンピュータ部門で小型コンピュータ入出力装置(さん孔タイプライター)の開発に従事.次にデパートレジ用プリンターの開発(世界初3ポジションプリンター・特許取得),銀行端末 ATM の開発,を経て,定年間近で当社の関本忠弘会長(経団連議長,後に **ISLIS**顧問)の特命による補聴器(コンピューター内臓)開発に参画.北海道大学との提携で試作機を作り,患者による聞き取りテストで成果を得て製品化を進める段階で,会長が退任となり製品化は中止となりましたが,このテスト中にある患者はどう見ても聞こえていないと思われるのに聞こえており,不思議な能力もあるものだなと気になっていました.また,この開発は研究所で行っていて,隣の部門では関本会長から“念力を応用して,何時でも,何処でも,誰とでも,通信できる機器を作れないか”との指示で「念力・氣」の測定の研究をしていました。

偶然ですが,私は学生時代に曹洞宗のお寺に下宿していて,和尚さんから念力で話が出来るとよく聞かされていて頭の片隅に残っていましたので,関本会長の話を聞いて偶然さにびっくりすると同時に“氣”の存在を感じました。

ISLISとの出会い

この頃 **ISLIS**が設立され, NEC 会長・経団連議長の関本会長が **ISLIS**の特別顧問になり NEC 社員が会員として参加していて,2年後に私が山本幹男理事長の了解を得て会員を引き継ぎました.当時,会員は厳選されていてなかなか入れなかったのが幸運でした.そして **ISLIS** の関連団体の人間サイエンスの会にも参加し,学会および講演会でいろいろな先生方からいろんな方面の不思議な超常現象の話の伺い,毎回興味津々でした。

“EGELY WHEEL” (バイタリティ・メーター)との出会い

この頃、晴海で開かれた健康博覧会で“EGELY WHEEL”(バイタリティ・メーター)(以下ホイール)という手をかざすとプラスチックの円盤が回転して自分の健康状態を測れるという玩具(発明者ジョルジ・エゲリ博士談)を見つけました。

生体エネルギーに反応して回転していると思われるがまだ仕組みがわからない物だとの説明でした。面白そうなので3万円で1個買って自宅で試してみましたが、最初は全然回らなかったのが、だんだん回るようになり7段階の6(生命エネルギーが非常に強いレベル)まで行き、なぜ回るのか、そしてひよっとすると“氣”を捕まえる糸口になるのではと心が弾みました。

O-リングテストとの出会い

そしてもう一つ、ISLISの講演会でO-リングテストの話聞き、当時はノーベル賞ものだと話も聞きました。不思議な話なので非常に興味が湧き、福岡明先生(福岡歯科 統合医療研究所 所長)に無理にお願いして医療関係者でない私を参加させていただき、その講演で私が被験者になり大村博士(O-リングテスト発明者)から首に異常があると指摘されびっくりしました。若い時自動車で追突されむち打ち症で首を痛めた個所だったのです。このとき O-リングテストに“氣”の存在を強く感じました。

もっと知りたくて、O-リングテスト研究会に入会して2年程勉強しましたが、なかなか難しく興味のあるレベルでは習得するのは難しく、職業として真剣にやらないと習得できないと感じ残念ながら諦めました。

H・K朝日研究所を設立

話は前後しますが、ホイールの回る原理の解明とO-リングテストの習得をしようと、退職と同時にH・K朝日研究所を設立し、アルファ波測定器等準備して1年間ほどいろいろな条件を設定してデータを取りましたが、ホイールをいつも安定して回転させることが出来ず、それでも何とか風・温度・磁力ではないということはわかり、やはり生体エネルギー(氣)で回っていると確信するに至りました。私自身はあるときはホイールを振り切る(例外的な強いレベル)ときもありましたが、自分の身体の中ではあまり“氣”が出ている自覚がなく、こうしたら確実に回るという手順が作れませんでした。

著名な気功療術師にも手伝ってもらいましたが、やはり確率高くホイールを回す再現性は得られませんでした。

そこで、自分で“氣”を出してホイールとの関連を確かめようと、劉超老師(町好雄研究室 研究員)の気功教室に入門して気功を習い始めました。

東京電機大の町好雄(初代 ISLIS 会長) 研究室の研究生となる

劉超老師の紹介で東京電機大の町好雄研究室の研究生として気功の現象解明の手伝いをしました。私が気功を行っている時、血流・脈拍が変化することを知り、また著名な気功療術師が氣を出して治療している時の色々な生理データの変化を目のあたりにして、ここでも“氣”の存在を感じました。

気功の鍛錬をしながら、ホイールの回転原理の追及を自分の身体で5年位続けましたが、再現性の手順がどうしても確立できず、現在もきっかけを模索中です。また、自分の“氣”を更に高めるために健身気功の鍛錬も行っています。

健身気功と国際健康健美長寿論壇

気功を習っている途中で健身気功という気功法に出会いました。少し余談になりますがこの

健身気功は中国国家主導の下で、世界の人々の健康向上のため中国 4000 年の歴史ある色々な気功法を研究し、2003 年に創作されたもので、現在世界 50 ヶ国・600 万人の人々が練功しています。私も最初から参加し、17 年になりますが、まだ何も薬を飲んでおらず、健康そのもので確かに良いと実感しています。又、世界各国から集まり、大規模な世界気功大会が 2 年に一度開かれ、この大会に合わせてよく国際健康健美長寿論壇という学術会議が開かれています。研究発表はほとんど気功を中心とした“氣”に関連したもので、通訳を通しての理解ですが図を見ただけでも奥の深い内容だと感じました。中国では幼少より“氣”についての常識があり、日本におけるような抵抗は少ないように思えます。この学術会議を見ているだけでも、もし今後“氣”が解明されるとすれば、今の勢いからすると中国かもしれないと予感します。

いろいろな思い出

- 関本会長にお逢いするといつもポケットからひねり煎餅のようになった 500 円硬貨を出し、気功師が曲げたものだと言って“氣”の存在に強い関心を持っておられた方でした。
- ISLIS の合宿で、長野県の分杭峠で“氣”のパワーを実感したこと。
- ピラミッドパワーを IRI でキュウリを使ってデータが取れたこと。
- 神沢瑞至(氣療塾学院学院長)先生の動物を眠らせること。(確実に再現性がある)
- O-リングテスト(私は大村博士に首の古傷を当てられ氣を実感した)のこと。
- 気功師による遠隔治療(耳鳴りが治った)のこと。

その他にも見聞したいろいろな事が思い出されますが、これらの不思議現象の多くは“氣”が関係していると私は感じていますが、説明できる理論がまだなく、ISLIS の活動が将来“氣”の解明ができた時、礎として評価されることと確信しています。

結び

現在は 30 年前に比べ不思議現象に関心を持つ人(特に若者)が少なくなった気がします。一つには今はスマホに代表されるように、あらゆる知識が苦労なく入手出来、かつ画像で何時でも・何処でも・誰とでも通信ができる便利な社会となって知る欲望が満たされており、不思議現象にあまり関心がないのだと思われます。

ただこの便利さが一巡した段階で人々が向かう先は、健康の追求そしてその根源にあると思われる“氣”の解明ではないかと思えます。

かつて、フランクリンが稲光から電気を発見し、電子がコントロールされていろいろな電気製品が開発され、コンピュータそしてスマホとなり更に量子コンピュータへと発展しています。同じように、生命の源と考えられる“氣”が発見され、コントロールされるようになれば、いろいろな応用製品・機器が開発され、誰もが健康で天寿を全うする幸せな社会が実現するのではないかと思えます。

ISLIS が設立されて 25 年間、山本幹男理事長の並々ならぬ情熱と河野貴美子先生始めスタッフの方々の不断の努力により、続けて来られていますが、“氣”が解明されて人類に役立つその時が来ることを信じて、この ISLIS が苦しい時期を乗り越えて、益々活躍され社会に貢献されますことを祈念して筆を置きます。

「アルティメットプログラム」の紹介と体感

多田 圭一

株式会社 MK コーポレーション 代表取締役

要旨:「アルティメットプログラム」とは「宇宙・人・魂・心・物質など、可視・不可視問わず、この世を形成する全てがエネルギーであり、相反する性質を持った『陽=プラス』『陰=マイナス』のエネルギーバランスが心身の健康のみならず、生き方も左右する」というエネルギーワーク共通の基本的な考えのもと、日本発祥のエネルギーワーク「タマラ[®]」を採用して作られた独自のエネルギーワークプログラムである。

「アルティメットプログラム」では、プラスとマイナス、それぞれのエネルギーそのものを用いて、ダイレクトに身体や脳、空間、土地などの調整を行い、エネルギーそのものを直接的に変化させることにより、心身の健康はもとより、生き方全般において本来の状態を取り戻し、望む方向への変化を加速できると考え、現在、科学的見地との合致も目指している。

キーワード: QOL, ストレスマネジメント, パフォーマンス, リカバリー, 脳ケア, 脳トレ, 未病, 予防, 成長, 成功, 自己実現, 免疫力, 36.5 度, 集中力, 能力開発, エネルギー, タマラエナジー[®], トレーニング

「アルティメットプログラム」の紹介

ビジネス・人生・人間関係・心身の健康・・・様々なシーンで私たち一人一人が心からの喜びと豊かさを実感して生きることを通して、世界をより良く変えていこう。

このビジョンを実現するために《あなたのビジネスと人生を最速で最高に実らせる》をコンセプトとした「アルティメットプログラム」を企画・開発。国内外で開催中。

「アルティメット・プログラム」は、相反する特徴を持つ陰陽両極のエネルギーを用途・作用に応じて使い分け、個人や企業のコンサルティング、心身のメンテナンス、土地のクリーニング等、様々なコンテンツに活用・構成された総合プログラムである。

2015年プログラム始動から、2020年1月現在までプログラム利用者数は述べ約3,000人にのぼる。政財界、法曹界、スポーツ界、芸能界、宗教界等、様々なフィールドで既に活躍される方々や、新時代のリーダーとなっていくであろう方々が、更なる成功やミッション達成へのあゆみを加速させている。

●人体への活用

活性作用の高いプラスエネルギーを全身・脳に取り込めるようにするエネルギーワークと、取り込んだプラスエナジーを効率よく使うために、脳そのものを活性させるエネルギーワーク、体内に蓄積されたマイナスエネルギーをクリーニングするエネルギーワークを行う。これによりエネルギーバランスを正常に保ちやすくなり、健康状態の改善、直感や感覚の鋭敏化、内観と気付きの加速、才能・能力が引き出される等の実感・実例が寄せられている。

●空間への活用

陰陽のエネルギーバランスにより、空間そのもののエネルギーを様々に変化させる。これに

より異なる様々な作用のあるエネルギー空間を作り出す。

光や電磁波,その他,様々な情報やストレスに耐えずさらされている現代人特有の疲れや雑念(これらを総じて「マイナスエネルギー」と定義している)を取り除き,「無」の状態(プラスマイナスゼロのバランス状態と定義している)となり,静けさの中で全身・脳・心を効率よく休ませ,鬱・いびき・無呼吸症候群の改善に役立つものから,脳を活性化させ集中力を高めるもの,自分の中に答えとして持っている未来の成功や幸せのプログラムを自ら受け取り,読み解くための空間など,用途・目的により様々な空間を生み出す。

●コミュニケーショントレーニングへの活用

人生に安らぎや喜びをもたらし,やる気を増幅させるために大きな要因となる家族,仕事,友人,恋人,ペットなど,大切なパートナーとの良好な関係を構築するためにエネルギーワークを使ったトレーニングを行う。感覚・直感・思いやり,想いを伝える表現力,傾聴など,上質なコミュニケーションのために必要な「センス」を磨き,自分にあったスキルを体得する。

【体験・体感の紹介】

●健康面での体感報告

基礎体温が上がった。低体温が改善された。風邪を引きにくくなった。心臓病,肝臓の数値が改善された。子宮筋腫が消えた。生理痛や生理前症候群,更年期障害が軽減された。精力がついた。アレルギーが改善された。不妊治療を続けていたが自然妊娠できた。疲れにくくなった。下痢や便秘になりにくくなった。肌が綺麗になった。肩凝りや腰痛が少なくなった。発病もない時に気づいたために完治できた。無呼吸症候群が改善された。いびきが軽くなった。不眠症での悩みが減った。鬱の薬を飲まなくても大丈夫になった。原因不明の目眩がおさまった。闘病中だが薬の副作用が軽くなったと感じる。冷え性が改善された。疲労回復が早くなった。

●メンタル面での体感報告

落ち込みにくくなった。立ち直るのが早くなった。ポジティブな言葉を多く発するようになった。イライラしにくくなった。不安やパニックにならなくなった。マイナスなことをあまり考えなくなった。気持ちの切り替えがうまくなった。自信がついてきた。自他に対して否定的ではなくなってきた。人とのコミュニケーションがとりやすくなった。感情のアップダウンをコントロールできるようになってきた。ネガティブな人に巻き込まれなくなってきた。場の空気を和ませたり明るくできるようになってきた。家族間の不和が改善された。自分の判断や感覚を信じようと思えるようになった。

●専門的なパフォーマンスの体感報告

過度の緊張による失敗が減った(演奏家,スポーツ選手など)。故障が減った(演奏家,スポーツ選手)。自分の身体やメンタルの状態が把握しやすく整えやすくコントロールしやすくなった(演奏家,スポーツ選手,施術家)。ピッチやタイム感が良くなってきた(演奏家)。クライアントの状態が以前よりも細やかにわかるようになった(施術家,医師,セラピスト)。施術時間が短縮した(施術家)。施術後の疲労感が軽減された(施術家)。クライアントからの評価が上がった(施術家)。子供達が落ち着き静かに昼寝をするようになった(保育士)。以前にはなかったようなアイデアがでてくるようになった(アーティスト)。以前はネガティブなクライアントが多かったが,前向きな人が集まり前に向かうための相談の方が多くなった(占い鑑定)。

●生活面での体験報告

以前より掃除をするようになった。部屋の植物が元気になった。切り花が長持ちするようになった。家族から以前より料理が美味しくなったと言われる。電車の乗り換えやエレベーターなどの乗降のタイミングがスムーズになった。駐車場が空いたり、電車の座席やカフェの座席などがタイミング良く空いて座れる確率がどんどん高くなっている。自分がどこかのお店に入るとそのお店が突然混み始める。人が集まってくるようになった。

●仕事・能力面での体験報告

判断・決断が早くなった。集中力がついた。ケアレスミスが少なくなった。重要な仕事をどんどん任されるようになった。上司や同僚から信頼されるようになった。以前なら慌てていた状況でも落ち着いて対処できるようになった。チーム全体の意思の疎通が早くなり、仕事が早く進むようになった。解決力と行動力が上がった。やるべきこと、やらなくていいこと、やりたくなくてもやらなければならないことなどを明確にしやすくなった。タイミングが合う、合わないがはっきりした。合う人とはどんどん合って仕事が捗る。他人の価値観や能力などを察することができるようになり、距離感がわかるようになった。適材適所に人を置けるようになり、仕事が前に進んだ。パラレルワークなのでバランスを取るのが難しかったが、全てがいいタイミングとバランスになってきている。仕事の案件や関わる人や会社のレベルがどんどん上がっていく。問題浮上のスピードと解決のスピードの両方が上がっている。論理的な思考力が身についてきた。ディベートが得意になってきた。

多田 圭一 : info@mk-c.tokyo (株)MK コーポレーション 代表取締役
〒104-0061 東京都中央区銀座 6-13-16 銀座 Wall ビル UCF5 階
TEL: 03-6382-7580 FAX: 050-3588-1257 URL: <https://www.mk-c.tokyo>

Introduction of "The Ultimate Program"

Keiichi TADA

MK Corporation's Representative Director (Tokyo Japan)

Abstract : "The ultimate program" is the original energy work program that adopts cause of the energy work common basic thought, "energy balance of "positive = plus" with the property that all forming the world regardless of the visible invisible including space, a person, a soul, a heart, the material is energy and disagrees with "shade = minus" controls not only the mental and physical health but also the way of life", energy work "Tamara ©" of the Japan origin, and was made.

The mental and physical health regains an original state in the way of life whole from the start by adjusting a body and brain, space, the land using a plus and minus, each energy itself by "the ultimate program" directly, and changing energy itself directly and thinks that we can accelerate the change to the direction to expect and aims at the agreement with the currently scientific standpoint.

Keywords : QOL, stress management, performance, recovery, brain care, brain training, non-illness, prevention, growth, success, self-realization, immunity, 36.5 degrees, concentration, ability development, energy, Tamara energy ©, training

Keiichi TADA: MAIL: info@mk-c.tokyo URL: <https://www.mk-c.tokyo>
MK Corporation Representative Director
〒104-0061, 6-13-16, Ginza, Chuo-ku, Tokyo Ginza Wall building UCF5 F
TEL: 03-6382-7580 FAX: 050-3588-1257

“自然治癒力活性化”による遺伝的体質の改善

古川 彰久

国際生命情報科学会(*ISLIS*) 評議員
(株)エイエムシイ,(有)イキイキライフ 代表取締役
サトルエネルギー学会 事務局長

要旨: 私たちの命には、物質としての体だけでなく、その背後に目に見えない意識やエネルギーが存在しています。自然治癒力はそのエネルギーの現れともいえます。自然治癒力とはどのようなものなのか、私自身が薬や医師に依存せずに、自然治癒力の活性化により体質改善に挑戦してきた状況をご報告いたします。

キーワード: 自然治癒力、体質改善、波動機器、遺伝子

私の自然治癒力への挑戦、薬や医療に依存しないで体質改善

1. 前半(20歳位から60歳ぐらいまで)

(1) 挑戦へのきっかけと実践: 野口整体との出会いと親友の死

① 野口晴哉師の教え

整体協会の野口晴哉先生は統合医療の考えを既に実践されており、その教えを受けたことが私が自然治癒力への挑戦を実践するきっかけになった。

その指導内容: ●治療術から健康法へ、●愉気法と活元運動、●体癖論と潜在意識教育
出来る限り薬や医療に頼らず、自らの自然治癒力を向上させる。

② 大学卒業後、鉄鋼会社入社: 野口整体に身体の仕組み、城野宏氏に脳力開発と情勢判断学、天風会に心身統一法を学ぶ。

③ 親友の死

●私の東大柔道部以来の親友が白血病になり、東大病院より、余命3ヶ月と宣告された。たまたま、主治医が柔道部の先輩だったので、その先輩が今の医療ではどうにもならないので、何かいい方法があれば本人に勧めてほしいといわれた。私が整体療法を勧め、主治医の先輩も了解された。

●整体操法は本人の治癒力を活性化して行くので、操法を受けると高熱が出てしばらくすると治まってくる。このようなことを何回か繰り返し、かなり改善されたが、本人が徹底できず、体力回復を目的に親友の医者にブドウ糖注射を打って貰ったために、整体操法を継続できず、逝去した事。

●小生自身、この間に自己の自然治癒力に挑戦することを決心した。27才当時、私は乱視と近視で視力が0.1以下だった(親も、兄弟もみな目が悪く、小生の目の悪いのは遺伝的体質といえる)が、整体の考えを実践すれば遺伝的体質も改善できると考え眼鏡を外した。在勤中さらには米国留学中も眼鏡をかけず頑張る。

56才当時0.5程度に回復し、日常生活は眼鏡なしだが、運転時には眼鏡使用。

(2) 情判会畏友増田寿男氏との再開と波動事業への関り

56歳の時、退社し独立: 在社中に中小企業診断士の資格を取りコンサルタントとして活動することとし、健康に関心があったので医業経営コンサルタントの資格を取得し、病院経営への相談にも乗ったが、医業経営の実態を知った。(病気を見つけ、薬漬けにする)

日本の医療: 西洋医療一辺倒、自然治癒力を認めない。(もともと西洋医療であった米国

では、医師同士でもその実力を競い合い、東洋医療を取り入れた方が治療の成果が上がるとし、国家として統合医療を推進し、現在では統合医療が主流となっている) 増田寿男氏との縁で、波動を知り、医業よりも波動の方が世の中に役に立つと考え、増田氏の要請を受け波動事業に参入することとなる。同氏は国産の波動測定機や波動転写機を開発し、特許も取得した。

(3) 生活環境の見直しと波動機器の活用

① 生活環境の見直し

- 私たちが摂取する水や食品等は私達の身体の要求に合うものが必要。
- 私たちの身体にとって取り込むことよりも余分なものを捨てることのほうが重要。余分なものを捨てることにより、身体の本当に必要なものを取り込む機能も活発になる。

② 波動機器の活用：波動測定器及び波動転写器を活用することによって、「感受性および自然治癒力を向上させる」。

○波動測定器について

- ・測定者がセンサーで、測定者が感受する生命情報を表現する道具：測定者の訓練が不可欠、測定に対する正しい姿勢が大切。
- ・生命情報のコミュニケーションツール：測定者の潜在意識の啓発、被測定者に気付きを与える。

○波動転写器について

- ・磁気による情報の伝達および潜在意識の活性化、場の交流による相性の向上。その結果、感受性および自然治癒力の向上。

③ 半年後、このような実践により、平成 12 年 1 月(61 歳)には、眼鏡無しで運転免許証を取得した。

2. 自らの身体を実験台に：後期(65 歳以降)

(1) 私のこのような実践は、自らの遺伝的体質を変える働きであり、その後、様々な体調の変化が起こる。

その後、腰痛が発生したが、これは神経系統を刺激し活性化したために、小生の遺伝的体質の問題点が表面化してきたものと受け止め、生活習慣特に食事に高波動食品を活用し改善した。これは骨格とそれを支える筋肉の働きの変化であり、腰から喉に向かって変化してきた。

その後、関節痛が発生してくる。これも徐々に変化していくが、観察していると、いわゆる東洋医学で言う、気・血・水のバランスを関節を通して整えているといえる。特に筋肉の働きを支えているのは血(血液)、水(リンパ液)であり、筋肉の働きが変化したことにより、血・水のバランスを整える必要があり、その過程で痛みが発生していると観察される。

更に丹田への力の入る具合により関節の痛みに変化が起こってくる。これは気が血・水のコントロールをしていると観察される。

これまで通り薬や医療に頼らずに体質改善を実現してきた。その実践を通し、私達の身体の仕組みを理解できた。

(2) 遺伝的体質の改善と身体の仕組みについて

- ① 筋肉痛：骨格は筋肉によって支えられているので、骨格のゆがみを矯正するには筋肉の働きを矯正する必要があり、その働きの変化が筋肉痛として表現されるようだ。
- ② 関節痛：筋肉の働きを支えているのは、いわゆる「血」、「水」であり、関節を通して筋肉に供給されているようだ。その要求の変化が関節痛として表現されているようだ。
- ③ 「気」の働きと情報活動

更に関節痛が丹田への「気」の入り具合によって変化していくのだ。このような働きを観察していくと、細胞の一つずつが相互に情報活用をしていると感じる。まさに、「血」、
「水」の背後に「気」の世界があると言える。

④ 細胞の生体内での情報活動

このような情報活用が生体内で行われ生命の維持が図られているのが、自然治癒力の働きといえる。

⑤ 細胞の生体と環境との情報活動

また、生体はこの環境の中で存在しているのだから、環境の変化にも応じていく必要がある。

そこに感受性の働きが存在する。そして情報活用には、私たちの意識の世界、それも膨大な潜在意識の世界が関わっているようだ。

(3) 私の主張

① 身体の変化は望ましいことである。変化がない方が異常である。

② 従い、痛み等身体の変化が出てきても、気を病まずに、自分の身体を変えようという働きが出てきたことを喜ぶべきである。

③ 何故そのような身体の変化を必要としているのか、自分なりに確かめて、自分の生活習慣や環境の変化を見つめて、生活習慣や環境を見直すべきである。

3. 我が国医療制度の問題

(1) 自然治癒力を認めていない

●戦後、これまでの東洋医療を排除し、西洋医療一辺倒の医療体制とした。

●「医は仁術」（「医は、人命を救う博愛の道である」）として、医師の資格を持ち医療を行う人の生活が成り立つように、医師の地位を絶対的なものとし、医師でない者がその領域を犯さないような利権構造を形成し、医師の役割よりもその地位を維持した。また、医師同士競い合ってはならないとした。結果として、検査漬け、薬漬けで成り立つような仕組みを作っている。

●“いのち”の精神性を認めず、個人の意識による活性化効果は、いわゆるプラシーボ効果として排斥している。

(2) 食品よりも薬を上位においている

●“いのち”は本来、空気・水・食品等によって育まれているが、我が国では薬を上位として、薬でないものが食品であるとの位置づけである。

(3) 先進国の動向

●ヨーロッパでは英国におけるホメオパシー療法や独国における波動療法等東洋的療法が活用されている。

●近年米国においても、成人病対策への西洋医療の限界に気づき、統合医療が国策として推進されている。

4. 私の主張を展開することと、私自身の実践：

サトルエネルギー学会、国際生命情報科学会等で以下のような小生主張を展開

(1) 波動脳力を活性化しよう

●健全な心身を維持するには、内にある潜在的な働き『波動脳力』（「感受力」や「自然治癒力」）に気が付き、この働きを活性化していくことこそが重要。

●まずは、内なる『波動脳力』を認め、その素晴らしい力に感謝すること。

●情報が氾濫し価値観が多様化してきた時代において、より望ましい「感受力」を育てるた

めには、特に精神面で、自らの生き方・生き様を確固としたものに確立すること。

- 私達にとって最も好ましい行動を訓練で繰り返すことにより習慣化し、その機能を潜在意識に取り込み、「直観力」(第六感)としての「反応力」を高め、更に、「自然治癒力」が発揮できるように活性化させる。

(2) 体質改善の実践と“いのち”の情報活動

- 私自身の体質改善の実践を通して、“いのち”の情報活動のあり方を実感した。
内部的にみると身体の一つ一つの細胞がお互いに情報交換をしながら機能を分担している。
その情報交換にいわゆる“血”“水”が関わっているようだ。
そして私たちの身体は常に流動的で、生活環境(衣食住)の影響を受ける。
私たちの内部の情報交換と外部との情報交換にいわゆる“気”が重要な働きをしているようだ。
- このような“いのち”の働きから、地球上の生命体が、その環境に合わせていろいろな形を取りながら変化してきたのが実感される。
これからも環境の変化に伴い“いのち”の形も変わっていくのかと思う。

(3) “いのち”の観察と科学

- 観測と素粒子の2元性について：観測者と観測対象
観測物の粒子性は客観性があるが、波動性は観測者によって異なる
異なる要因(仮説)
 - a. 情報としての特性：情報が存在するかどうかもより共振・共鳴現象による。
 - b. 観測者の観測エネルギーが対象物の波動性(エネルギー)に影響を与える。
- “いのち”の3面と生命活動の観察
生かされている“いのち”：環境との調和、変化への対応
生きている“いのち”：自立、可能性への挑戦
見つめている“いのち”：ロゴスとパトスの2面性、自己責任、愛と感謝
- 感受性と自然治癒力
 - a. 肉体は「いのち」のハードウェア(入れ物)であり、意識は「いのち」のソフトウェア(情報活動)である。
 - b. 感受性は外に対する情報機能であり、自然治癒力は内における情報機能といえる。
 - c. この場合の意識には、広大な潜在意識の領域を含み、情報の中には、気のような微弱なエネルギー(Subtle Energy)を含む。

(4) プラシーボ(偽薬)効果について

- ① プラシーボとは偽薬のことで、薬の薬効を判定するのにプラシーボ効果では薬効が有ることにならないと判定される。
- ② 確かに、緊急を要する場合等いわゆる急性期病には薬効が重要であることは明らかである。しかし、日常生活において、強い薬の副作用や薬への依存症を考えた場合、プラシーボ効果によって同じ効果が出るならば、むしろその方が良いはずである。
- ③ プラシーボ効果とは何かといえば、その人の意識の持ち方、価値観や感情によって、自然治癒力の発揚が左右され、病気や症状が変わるということである。もともとそのような機能が私たちに備わっているのだから、プラシーボ効果が出るように、積極的に意識や感情を高めれば、少しでも副作用のある薬への依存を排除できることとなるはずである。

(5) “いのち”の視点からの科学のあり方

- ① 人類は、その開発した科学や技術によって地球上を我が物のように支配し、蹂躪しつつあり、近年そのような傾向に対し、環境問題等対応が必要になっている。

- ② 科学の在り方についても、宇宙の真理を追究するということが、所詮人類が作り出しているものだから、客観性の範囲にとどまらず、“いのち”の視点からの取り組みも重要だと考える。
- ③ より多くの人々が上述のような自らの潜在的な力に気づき、目覚めれば、健康観や人生観がより積極的になり、現在の社会が抱えている閉塞観を打破できるはずだ。まさに波動という言葉が提起する生命力や精神性の回復こそが今求められているのだと確信している。

(補足)

(1) 波動についての考察

● 近代科学の歴史

・ 物質中心(客観性・再現性・普遍性) : 精神・意識の排除

● 微弱なエネルギー : 気について

・ 国際生命情報科学会 (ISLIS) の研究発表

“気は、確かに人体間で交流しているが、何がどのように伝わるのかは現在の科学では未解明”

● 人体センサー : O リング

● 量子論 : 天野先生の生気体理論, 精神力・生命力の存在

江崎玲於奈先生の二元性, 科学精神の二面性, ログスとパトス

(2) “いのち”のあり方と自然治癒力

① チャールズ・ダーウィン : 「種の起源」

- 最も強いものが生き残るのではなく,
- 最も賢いものが生き延びるわけでもなく,
- 唯一生き残るのは変化できるものである。

② “いのち”の根幹にある自然治癒力

- 60 兆個あると言われている細胞がそれぞれ勤めを果たしており、そこには相互の連携がある。
- その細胞も動的平衡状態にある。(福岡伸一)

(3) 古川彰久著書 文芸社 平成 13 年 6 月発行 :

「知らないうちに強くなる – 無限のパワーを生む『波動脳力』」

Improvement of the Hereditary Make-up by the Self-Healing Power Activation

Akihisa FURUKAWA

President of AMC Co. & Active Life Co.

Abstract: In our human life, not only the body as a material exists, there are also the senses and the energies which cannot be seen. The natural healing power may be one of these energies. I improved my constitution by activation of this natural healing power without depending on medicines and doctors. The practical conditions are reported here for such improvement.

Keywords: Natural healing power, Improve the constitution, Subtle energy equipment, Gene